第 50 巻特別企画「心に残った一編」

「保健物理」とともに

真田 哲也*¹

T. SANADA, K. FUJIMOTO, K. MIYANO, M. DOI, S. TOKONAMI, M. UESUGI and Y. Takata; Measurement of nationwide indoor Rn concentration in Japan. *J. Environ. Radioact.*, **45**, 129–137 (1999).

「保健物理」との出会いは、ラドンと共にあるといっても過言ではないくらい、私の中ではそれぞれが密接に関係している。前職では、環境放射能分析を中心に調査・研究を行って来た。当初は、フォールアウト調査の分析を担当していたが、わが国においてもラドン濃度調査が実施され担当することとなった。

わが国においては、1990 年代に放医研で全国調査を実施しておりデータは蓄積されていたが、トロンの寄与を無視できない等の問題点が浮き彫りとなり、その後、その影響を評価できる構造のラドン濃度測定器が開発された。私はそれを使って全国を対象としたラドン濃度水準調査を担当した。当初は一般家屋内の調査で終了する予定であったが、屋外調査、職場環境調査へと順次展開して行った。

結果の評価については委員会を設置し、浜田達二委員長、黒澤龍平先生、下道國先生、飯田孝夫先生をはじめとするメンバーで検討を進めた。この委員会では、調査のプロトコルも詳細に議論され、例えばラドンの校正についても、将来国際的な比較検討にも耐えうるよう、国内の校正実験だけではなく、海外のラドン標準曝露装置を有している研究機関で行わなければならない等の提言もいただいた。また、米国 EML との共同比較実験も実施した。

屋内・屋外・職場環境のラドン濃度調査の結果はそれぞれ論文にまとめられ公表されている。その中でも家屋内のラドン濃度調査をまとめた論文は思い出深い一編である。私と「保健物理」とのつながりをより強くした一

編であると換言できる。この論文は幸運にもわが国のラドン濃度調査結果の一つとして UNSCEAR 2000 に引用されている。

私はこれまで主に環境に及ぼす影響という観点から保健物理学と係わって来た。その中でも特にラドン濃度の調査・研究を通して単純に濃度を測定するだけではなく、例えば、測定値の信頼性はもとより国際的な視野に立った積極的な取り組みは現在でも通じる大切なことであると考えている。

当時、若手研究会で切磋琢磨した研究者・技術者も今ではそれぞれの分野で活躍する専門家となっている。その時出会った多くの先輩たちの年齢に皆が近づいている。これからも保健物理学の中で‘もがきながら’新しい知見を得たいと考えている。この 50 巻は「保健物理」と自らの関係をレビューしこれからを考える良い機会だと感じた。

真田 哲也 (さなだ てつや)

1964 年広島市生まれ。東邦大学大学院理学研究科化学専攻。博士 (理学)。(公財)日本分析センターを経て、現在に至る。国際標準化機構 (ISO) TC85/SC2 国内対策委員会委員、ASNITE 試験に係る審査員及び技術アドバイザー、日本保健物理学会国民線量評価委員会委員。

*¹ 北海道科学大学保健医療学部診療放射線学科